



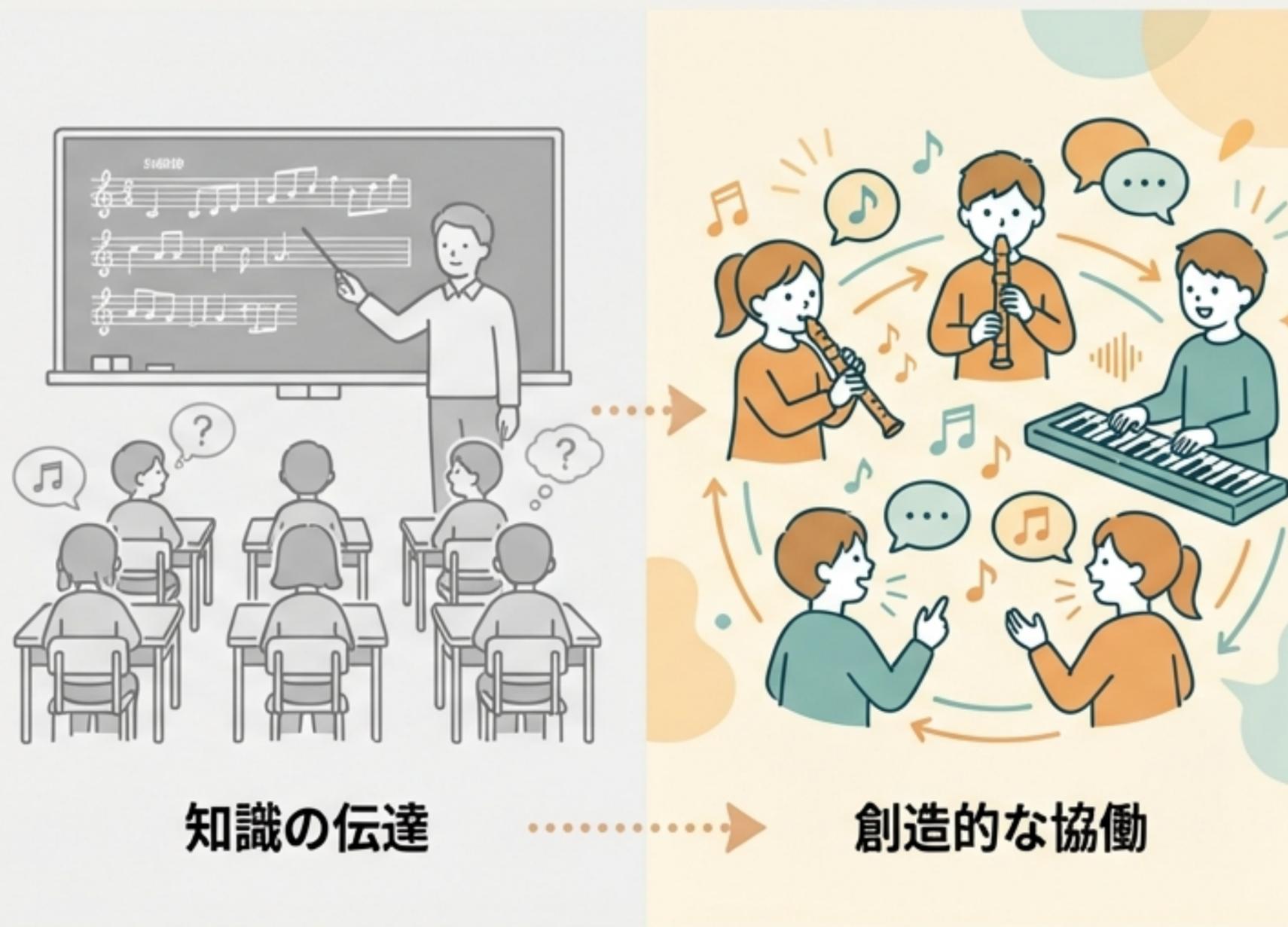
新たな学びを創造する「反転授業」

音楽科における可能性と実践



授業時間、もっと「創造的な音楽活動」のために使えたら？

- 現状の課題: 多くの授業が、音取りや楽典といった知識伝達に多くの時間を費やしています。
- その結果: 子供たちが主体的に表現を工夫したり、仲間と協働したりする本質的な音楽活動の時間が不足しがちです。
- 本プレゼンテーションのゴール:
「反転授業」を通じて、教室を子供が主役のダイナミックな活動の場へと変える、具体的な方法を探ります。



授業と宿題の役割を「反転」させる、新しい学びの形

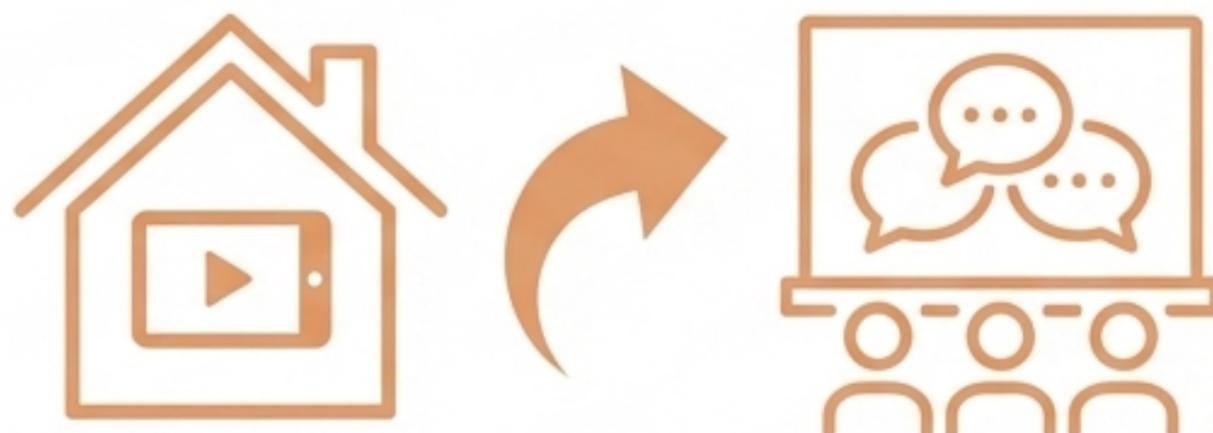
【従来の授業】



教室で「知識のインプット」
(教師による講義)

家庭で「知識の定着」
(宿題・復習)

【反転授業】



家庭で「知識のインプット」
(デジタル教材で予習)

教室で「知識の活用」
(協働学習・問題解決)

教室での活動を「知識をインプットする場」から、
「知識をアウトプットし、使う場」へと転換します。

反転授業の普及を後押しする2つの潮流



1. 教育方針の進化 (Educational Policy Evolution)

1980年代から続く「自ら学び自ら考える力」の重視。

教育基本法が定める「自ら進んで学習に取り組む意欲」の育成という目標を具体化するアプローチです。



2. テクノロジーの進化 (Technological Evolution)

ICT環境の整備、タブレット端末の普及、そしてオープン教材（OER）の増加が、この授業形態の実現を可能にしました。

学習効果を最大化する3つのアドバンテージ



効果① 学習活動時間の 「実質的な増加」

講義を家庭学習に移行することで、教室での演習や協働学習の時間を創出。家庭学習の習慣化にも貢献します。



効果② 知識を「使う」 機会の「飛躍的な増加」

インプット中心からアウトプット中心の活動へ。知識の確認や応用、協働学習に時間を割くことで、知識の定着を促し、学習意欲を高めます。



効果③ 学習進度の「加速」

オンライン学習と対面学習を組み合わせる「ブレンド型学習」の一形態として、効率的な学びを可能にします。

導入の前に考慮すべき4つの現実的な課題



1. 端末管理とセキュリティ

家庭での学習用途外使用や情報モラル教育の必要性。



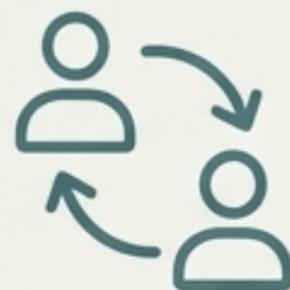
2. 質の高い教材の不足

日本語のオープン教材はまだ限定的。教員による教材作成と共有の仕組み（リポジトリ）が重要になります。



3. 家庭学習の担保

全員の事前学習を前提とする難しさ。学習意欲や家庭環境（塾や習い事など）の差への配慮と、未学習者への支援が必要です。



4. 教員の役割変化

知識の伝達者（Lecturer）から、個々の理解度を把握し、協働学習を促す促進者（Facilitator）への意識変革が求められます。

課題を乗り越える鍵：デジタル教材の工夫



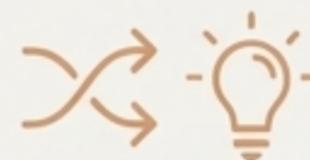
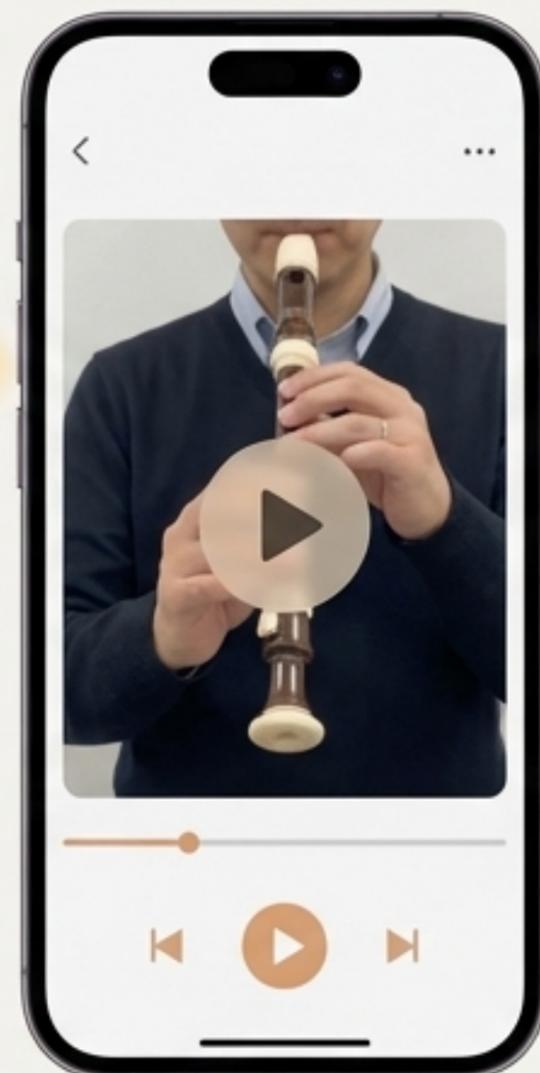
具体的な解決策： デジタル学習プリント

プリントにQRコードを付記。生徒はわからない問題でQRコードを読み取り、ヒント動画を視聴できます。

デジタル学習プリント

Recorder $\text{♩} = 150$

The image shows a digital learning printout for a recorder. It features a musical score with a tempo marking of 150. A QR code is placed next to a measure of the score, and a play button icon is overlaid on the QR code. An orange arrow points from the QR code to a smartphone.



授業の変化

これにより、生徒は家庭で「わからない」を解消し、「質問」を持って授業に臨むようになります。「授業はは家庭で、質問は学校で」という逆転が生まれます。



目指す姿: このような工夫は、教育の機会均等と、一人ひとりに合わせた個別最適化された学びの実現につながります。

それでは、音楽科の授業でどう活かすのか？

時間がかかりがちな「音取り」「創作」「調べ学習」こそ、反転授業の導入で、子供たちの自発的でダイナミックな音楽活動に変えるチャンスです。



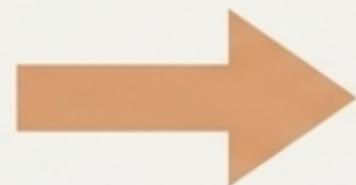
【実践例① 表現】音取りや個人練習は、家庭で。 教室は、合わせる喜びに集中。



【家庭で】

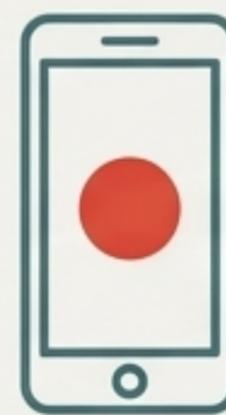
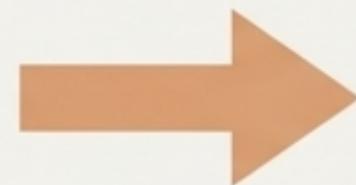
Googleクラスルーム等で共有されたパート練習用の手本動画を視聴し、個人練習を済ませる。

(例：リコーダー、鍵盤ハーモニカ、歌唱)



【教室で】

授業開始と同時に合奏・合唱からスタート。全体の響きを聴き合ったり、表現を工夫したりする時間に集中中投下します。



【発展】

「歌ってみた・演奏してみた」動画を家庭で撮影し、クラスで共有。互いの成長を確認し合います。

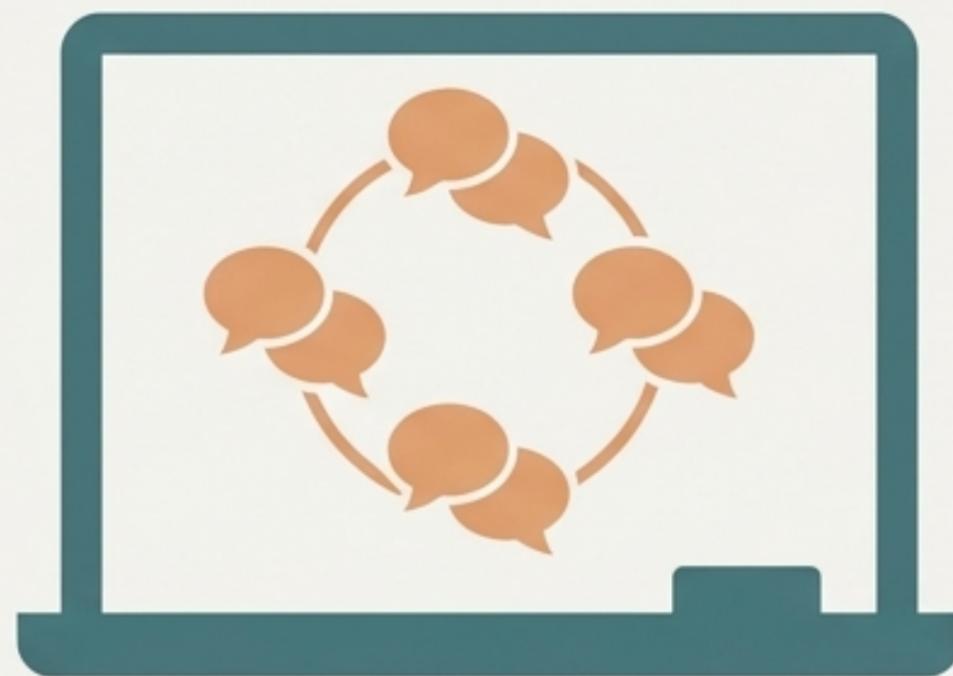
【実践例② 創作】 アイデアの種を家庭で育み、教室で開花させる

家庭：発想と試作



作曲のヒントとなる動画（例：様々な現代音楽の手法、実際の曲^{*}）を視聴し、創作のイメージを膨らませる。指示に従い、MIDIデータ等で曲の断片を作成しておく。

教室：協働と洗練



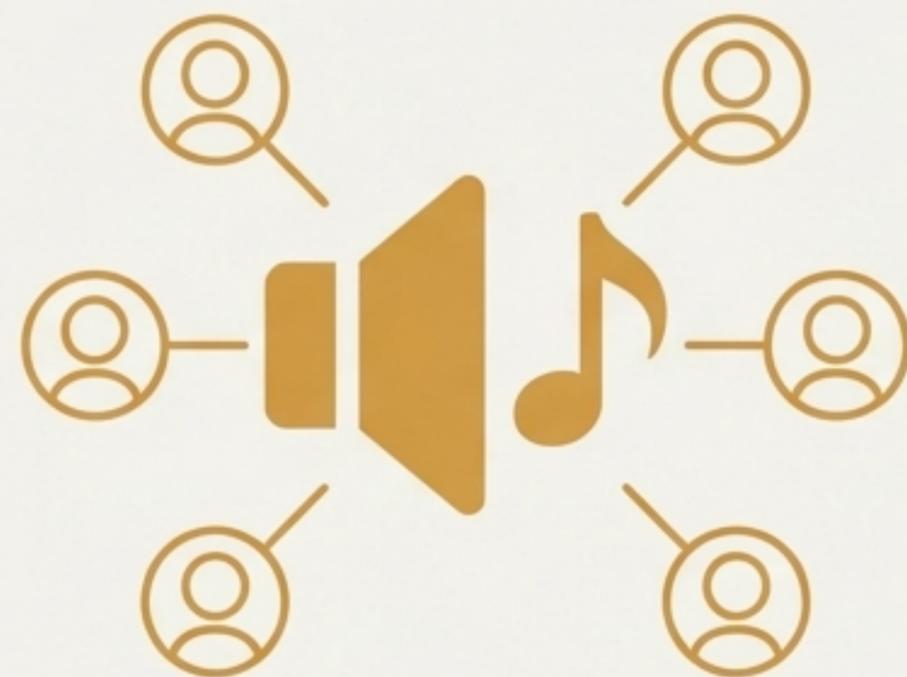
授業は各自が作った音楽を聴き合う活動からスタート。表現したいテーマについてアドバイスし合う協働学習を中心に展開します。

【実践例③ 鑑賞】 生徒自身が教材を探す 「探究型」の学びに

家庭：探究



教室：共有と対話

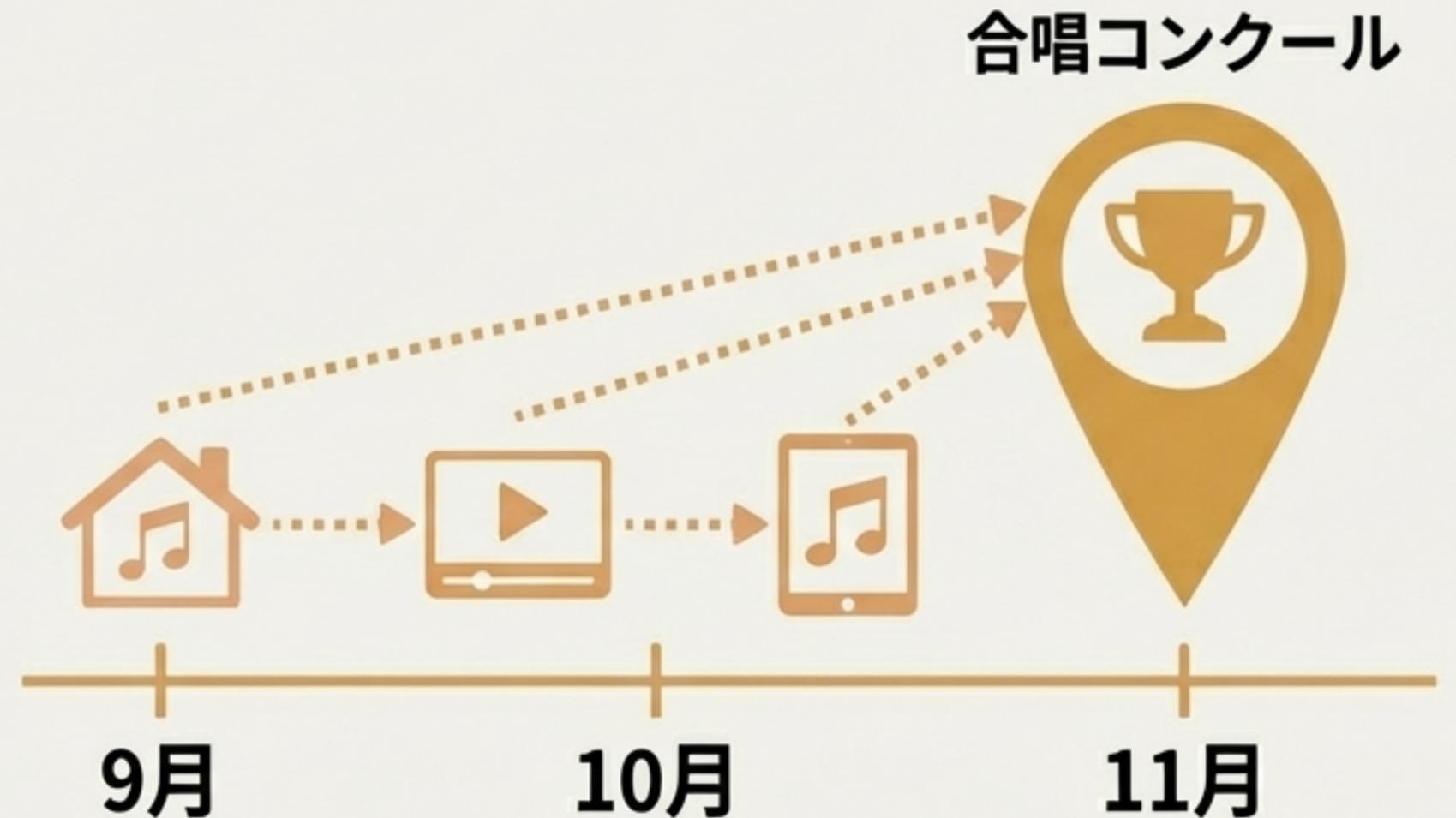


「動物の様子を表す曲」など、テーマに沿った曲を各自で探してくる、という課題を出す。（例：描写音楽の学習）

生徒が見つめてきた曲が「みんなの教材」になります。選んだ理由を発表し、曲の面白さを共有・議論することで、モチベーションが格段に向上します。

授業を越えた広がり：カリキュラム・マネジメントへの応用

- 合唱コンクール、音楽劇、地域の芸能発表会といった、準備に時間がかかる学校行事にも反転授業は有効です。
- 個人練習や資料の読み込みを家庭学習とすることで、学校ではより高度で創造的な合同練習に集中できます。



教師の新たな役割：知識の伝達者から「学びの促進者（ファシリテーター）」へ



反転授業の成功は、教師の役割変革にかかっています。教室では、一人ひとりの児童の理解度を把握し、個別に支援しながら、子供たち同士の学び合いをデザインし、円滑に進めるファシリテーターとなることが求められます。

子供一人ひとりの「学びたい」に応える音楽教育へ

反転授業は、時間の制約を乗り越え、子供が主役のダイナミックな音楽活動を実現する強力な手段です。これは単なる画期的な教育手法ではありません。これまで教育現場が目指してきた「より良い学び」、すなわち学習者中心の学びを具現化する、地に足のついた実践そのものです。

**さあ、あなたの授業から
ら始めてみませんか？**